

【376】

氏 名 (本 籍)	なかむらのぶお 中 村 伸 夫 (茨 城 県)	
学 位 の 種 類	博 士 (芸 術 学)	
学 位 記 番 号	博 乙 第 1834 号	
学位授与年月日	平成 14 年 3 月 25 日	
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当	
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科	
学 位 論 文 題 目	〈郭店楚簡〉の書法に関する研究 －『老子』簡を中心として－	
主 査	筑波大学教授	角 井 博
副 査	筑波大学教授	Dr. phil 中 山 典 夫
副 査	筑波大学助教授	博士 (芸術学) 岡 崎 昭 夫
副 査	筑波大学名誉教授	文学博士 相 馬 隆

論 文 の 内 容 の 要 旨

中国における20世紀後半の考古学的成果は実にめざましく、黄河流域のみならず長江流域各地においても陸続と考古遺物が発掘され、『文物』『考古』をはじめとする学術雑誌や豪華な図録類によって基本的かつ重要な資料が公表されている。このうち近30年来の新しい出土資料の中には、戦国時代から前漢初期にかけて書写された肉筆の文字資料が多く含まれていて、秦始皇帝によって文字が統一される以前の各地の様々な書体・書風を究明するための好材料となっているが、そのような研究はいま端緒を開いたばかりの感がある。戦国七雄のうち楚国(前4～3c)は、南方の長江中流域に勢力を張った大国である。楚国文物の発見の記録はすでに「南斉書」「南史」に見えるが、むろん伝存するものはなく、近年発掘の各遺跡からの出土例、とりわけ竹簡・帛書など肉筆の文字資料を豊富に出土していることが一つの特色として喧伝されている。

本論文は、如上の出土状況の中にあって、1993年に湖北省荊門市の郭店の1号楚墓から出土した〈郭店楚簡〉を取り上げ、荊門市博物館編『郭店楚墓竹簡』(文物出版社、1998年刊)を底本に主として『老子』簡の書風を様々な角度から分析し、戦国期以前からの文字資料と書体史の流れの中で書法の実証的に比較・考察したものである。郭店楚簡は道家・儒家の典籍の写本であり、出土当初から中国思想史研究の重要資料と注目されているが、鮮明な筆路をとどめる肉筆の文字資料であるだけに、書法史上においても資料性の高いものであることは言を俟たない。その書風は一見して同様の趣に見えるが、様々な書風が混在しているようである。そこで筆者は、郭店楚簡を揮洒の心理及び毛筆の操作の具合を確認できる好個の資料と位置付け、字体・書風を分析し、造形美・筆画変容を書法的に考察し、規則性・特異性の検証を試みたのである。

本論文は、序章に続く第1～5章、結語、そして別冊図版から成るが、各章の構成及び論旨は下記の通りである。

【序 章】秦始皇時における文字の統一とそれ以前の文字表現の状況とを概観し、中国古代の書法史研究における郭店楚簡の資料的価値を確認し、本研究の目的と本論を展開する課題を述べている。

【第1章】郭店楚墓の位置・形状・随葬品など出土状況を整理し、ついで墓主の身分、墓葬の年代と出土した竹簡の書写年代について先行研究を踏まえて論述し、さらに紙が発明される以前の書写材料としての竹簡の特性を追究している。郭店楚墓は土坑竖穴式木槨墓で、規模はさほど大きくはないが290件に及ぶ随葬品があり、墓主は楚国の東宮の学問の師であり、墓葬の年代は紀元前3世紀前半、写本としての竹簡の書写年代はそれを遡るもの

としている。

【第2章】郭店楚簡以前の古代の文字資料とその書法について概観するもので、その代表的な遺品を選択・紹介するとともに、それら文字資料の表現の特性を説示している。

【第3章】郭店楚簡の書写内容は、先行研究により道家関係の典籍4編、儒家関係の典籍14編の都合18編に分類・整理されている。本章では全18編を対象に、竹簡の形状と内容とを確認し、各編の書風について考察を加え、その特色を7グループ、7人の人物が抄写に当たっているとの結論を導き出している。

【第4章】本論文の中核を成す部分で、全18編のうち特に優れた書法を見せる『老子』簡を対象に、「筆法」「字形」などの観点から書法の特質を詳細に考察したものである。文字総数1,718字を精査することによって、①一筆書きの曲線構造、②肥筆、③合文、④簡略化、⑤複雑化、⑥左底右高、⑦初見の字形、などの特性による分類を試み、それぞれについての規則性及び特異性を検証し、当時使用された毛筆についても言及している。

【第5章】第4章における検証を基に、文献資料等によって伝わる伝鈔古文と郭店楚簡の文字とを比較し、類似する文字の検出作業を行っている。伝鈔古文にかなり信憑性のあることを示唆し、原件と文献による広範囲で体系的な比較検討のための一助を成している。

【結 語】書というものの定義を先ず説示し、本論文によって闡明になった諸事項や問題点を確認するとともに、漢字における五つの書体の中の楚簡の特性と意義とを整理し結論としている。また最後に、近々公刊予定の『上海博物館蔵戦国楚竹簡』（約1,200枚）によってさらなる書法研究を推進する所信を表明し、今後の課題としている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

中国の書は文字の発生以来、書体の変遷と書風の変化とが相俟って、もっとも東洋的な芸術として成育してきた。人間の知恵と工夫とにより、書体の変遷は時代の推移とともにごく自然に進展してきたのであるが、これを人為的に制定したものが秦始皇帝による秦篆ということになる（前220）。ところが、近年における様々な輝かしい発掘成果により、篆書成立以前の書体・書風の変遷に様々な脈流のあったことを肉筆資料によって実証できる可能性が生じてきた。筆者は、中国古代文字の書体と書法形成について長年にわたり関心を抱き、金文を素材に制作活動を実践してきた書法家であるが、この度、肉筆資料である郭店楚簡を篆書成立以前の書法史解明の重要資料として位置付け、大量の字母を書体・書風の面から分析・整理し、書法的に考察し、その規則性や特異性を検証している。

郭店楚簡に関するこれまでの研究は、楚簡の内容からしても中国人学者による思想史的研究が主体であり、せいぜい字書の編纂がなされるくらいであった。また、日本側においても書風の総括的な印象を述べるに留まり、書風の変容についての考察を見ることはなかった。その意味において本研究は、新出土品に対する初めての本格的考察であり、先ずもって独創性と意義を認めることができる。楚簡の書風は、偏平な結構、起筆でトンと当たりを付け、湾曲した線を引き放つところに特色があるが、筆者は様々な角度から様式的分析を試み、楚国の書法の多様な実相を解明し、これを7種の様式、7人の筆者に分類し、さらに種々の特性を導き出している。本論に展開する綿密な分類法と比較考察は精緻であり、その作業は実に手間・暇のかかる難事であったろうと想察される。

以上の様々な視点から、本論文は、いかにも古代文字を素材に作家活動を展開する筆者に相応しいユニークな主題設定であり、鋭く精力的に解明した労作として、方法論的にも独自性の高い論文として高く評価することができる。本論文によって筆者の研究目的は概ね達成されたものと思われるが、本人が表明しているように近年上海博物館が購入した楚簡（孔子の詩に関する教えを書き留めたもの）のさらなる精査・考察、それによる総合的な研究に発展するように、今後の一層の精進を期待するものである。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。